

学期レポート 2011 年春学期



日本財団聴覚障害者海外奨学金事業

第 4 期生 武田 太一



冬、そして春のボストン

一時帰国から戻ってきたら、待ち受けていたのは辺り一面雪の山であった。自分が住んでいる地域ではたまに警報ランプが点灯し、道路の偶数側に止めてはいけないという決まりがあるため、自分の車は友人宅に預けておいてあった。その車が今どうなっているのか気掛かりであったが、他にも雪に埋れている車を見ると、何も自分だけではないことを実感する。しばらくの間は車は不要であったが、数週間も経つと車が必要になり、いざ車を取りに行こうと思ったら大量の雪かきが待ち受けていた。もちろん雪かきの後は腰痛が待ち受けていたのは言うまでもない。

今までに雪国で暮らしたことがない自分にとっては初めての経験だらけであった。雪でも車を使う人はいるので、主要道路には必ず除雪車が通り、除雪すると共に大量の塩をまいていく。塩には雪を溶かす成分が含まれているのは知っていたが、改めてこのように日常生活で使われるとは思ってもよらなかった。アパートの玄関にも大量の塩袋が積まれていた。雪道を歩くのは慣れてきたが、たまに雪が凍って道路が滑るときもあり、1度だけ思いっきり滑ってしまった。車を使うたびに雪かきという労働もつきまったり、講義が突然休講になったり(しかも大学に行ったあとで言い渡されることもある。)と全体としては苦い経験でしかなかったか、来年はもっと慣れるようにしていきたい。

3月中旬に春休みがあったのだが、春休みに入った直後に東日本大震災が発生し、日本の状況が気になってずっと部屋に引きこもって、インターネットで情報を見ているだけの日々であった。アメリカにいて何も出来ない自分に苛立ちを感じながら、休みを過ごしていた。今までの勉強の遅れを取り戻そうと復習などを進める予定であったが、全く出来ない状況であったため、春休み後の宿題などもすべての講義で融通を利かせてもらった。遠く離れていても、心身ともに影響のあったこの大震災を留学生活で忘れられない思い出となるだろう。復興には長い時間がかかるが、何らかの形で支援できたらと思う。

このレポートを書いている今は、あの雪国が嘘のように爽やかな春空の街になった。ボストン大学の近くでもレッドソックスの試合が始まったため、試合がある日は赤い服(レッドソックスのシンボルカラー)を着た人々でごった返すようになる。帰るタイミングを間違えると、いつもは空いている電車でもかなりの混雑になる。時々雨が降り、日本の梅雨を思い浮かべるなど、このボストンでも彩りあふれる四季に恵まれているということを実感する。

春学期の講義

この春学期では 4 クラスを受講した。それぞれのクラスは以下のとおりである。

- ME504 Elementary Math II 算数教授法 2
- DE591 American Sign Language 4 アメリカ手話 4
- DE672 ASL Structure アメリカ手話構造
- LS566 Language Acquisition 言語獲得

月	火	水	木
	DE591 14:00-15:30		DE591 14:00-15:30
ME504 16:00-19:00	DE672 16:00-19:00	LS566 16:00-19:00	

ME504 算数教授法 2

先の秋学期に続いて受講した算数クラスである。「線と角」「三角形」「四角形」「相似」「円と円周率」「面積と体積」「グラフ」「確率」などの指導方法について学んだ。問題そのものは小・中学校時代にも計算したことがあるものだが、いさ算数用語の英単語を並べられるとどういう意味か浮かんでこない。まして試験にはそれらの単語を書く必要があるため、覚えるのに必死であった。とくに二等辺三角形、不等辺三角形、正三角形なんて悪戦苦闘した。ちなみに英語ではそれぞれ isosceles triangle, scalene triangle, right triangle である。前の春学期で解答文の書き方など大分鍛えられたので、このクラスでは数学好きも手伝って、スムーズに進めることが出来、結果としていい成績を取ることが出来た。

DE571 アメリカ手話 4

アメリカ手話は一昨年にオーロニ大学でクラスを受講していた上に、ボストンでも何人かの聾者と接していくうちに習得できると信じていたので、受講はしない予定でいた。しかしこの聾教育コースでは必須講義であり、ASL1~6 までである。自分の ASL 能力を見もらうために面接を受けたとき、自分は ASL4 を受けたほうが良いと言われたが、後ほど確認してみると前のオーロニ大学で受講した ASL3 はこのボストン大学での ASL4 と同等のレベルである(オーロニでは週に 6 時間のクラスに対し、ここは 3 時間なのでその違いもあるだろう)。しかし復習と自分に言い聞かせて、この ASL4 を受講することにした。

テキストは Signing Naturally Level3 を使用した。「忘れられない出来事を話す」「面白いネタを共有する」「ルールを説明する」「事故について話す」「お金にまつわる話」などいろいろテーマに沿った手話表現方法を学んだ。講義中に動画も見てきたのだが、オーロニに大学では手話単語が全く読み取れないことが多かったの

に対し、今ではほとんど読み取れるようになってきた。また受講生全員で、「Bird of a Different Feather (異なる種類の鳥)」の手話表現を交代で行った。この物語はある鳥の夫婦に 4 匹の子どもが生まれ、3 匹は立派なくちばしを持っているのに、1 匹だけ変なくちばしを持って生まれてきたことから始まる。夫婦はあらゆる方法で立派なくちばしにさせようと試みるが、うまくいかなかったり、訓練学校に行ってもいい効果は得られずにいたが、手術によって形はいびつであるが何とか立派なくちばしに近い形になった。それでもその子は自分の居場所を見つけられずにいる。これは聴者家庭に生まれた 1 人の聾児に見立てられており、医者判断、あらゆる口話訓練、聾学校での教え、人工内耳などを連想させる物語である。物語自体は非常に興味深かったのだが、手話表現となると少し手こずってしまった。

この講義では講義への出席だけではなく、自分の ASL 動画を撮影して提出する Vlog(ブイログ)や、ASL Link(簡単に言うと、手話サークルみたいなもの)への 5 回以上の参加などが義務づけられている。今まで毎月の生活記録で動画撮影するのは慣れているのだが、大学内にあるマックのパソコンを使って撮影となると、マックの操作手法に最初は戸惑ってしまった。また手話表現にも気をつけながら撮影したのだが、自分の場合は CL が弱いとよく言われる。次の秋学期は ASL5 を受講する予定なので、ここでまた技術を磨いておきたい。

DE672 アメリカ手話構造

言語として認識されているアメリカ手話の構造について学ぶクラスである。言語学入門で習った「音韻論」「統語論」「語用論」などがこのクラスでも再び現れた。言語学入門では音声言語について学んできたが、音韻論については IPA(国際音声記号)を使うなど、聾である自分にとってはちんぷんかんぷんであった。音が違うこと自体は認識出来るのだが、どう違うのか? どう発音するのか? は自分の耳では永遠に理解することのない分野であった。しかし、この ASL 構造でも音韻論が現れる。音韻論というと、「音」というイメージが付きまとうが、音ではなく、その言語を構造するために必要な最小要素と思ってもいいかもしれない。ASL の音韻として基本の 4 つがあり、「手型」「手の平の向き」「動き」「位置」がある。さらにこれに非手指動作、などが加わっていく。

講師は聴者ではあるが、講義は ASL によって進められ、聴学生に対しても情報格差をなくすために音声通訳が付けられた。前の春学期では講師自身が ASL を使うことがなかったため、ようやく直接受信が出来る講義を受講することが出来た。しかし、ここで疑問が生じる。ASL は視覚言語であるため、講師が発している視覚言語を音声言語を聞きながら理解することが出来るのだろうか。音声言語を聞きながらになると、注意がそっちにってしまううえに、手話通訳というどうしても時間差が生じてしまうため、手話について話しているにも関わらず、手話表現のポイントが入ってこないのではと危惧している。これはまた周りの聴者に聞いていきたいと思う。

プロジェクト 2 つと最終プレゼンテーションが課せられた。プロジェクトは象徴性手話の調査、意味論手話の調査の 2 つであり、前者は聴者 3 人、後者は聾者 3 人へのインタビューを行った。象徴性手話の調査は、アメリカ手話を全く知らない聴者に「木」「馬」「象」などのアメリカ手話を示して、どういう意味か想像してもらうものであった。同じ表現であっても、聴者によって返ってくる答えがまちまちであった。またその人が生まれ育ってきた環境にもよるのか、「象」と表現した手話が「落ちる」「潜る」といった回答が多かったのに対し、「スリッパ」と答えが返ってきたのは自分 1 人だけであった。アメリカ人だとスリッパを使う習慣がないためであろう。ちなみに自分が聞いたのは香港生まれの方であった。意味論手話については、例えば手型は同じなのに動きや方向が違うだけで意味が違って来る手話グループを使って、もし文中でこの表現だけが違っていても通じるかどうかを確かめる調査である。自分は「Happen」「Mistake」「Wrong」の手話を使って調査を行った。これらの単語は Y 手

型をあごに 1 回つけるか、2 回つけるか、あごにつけながら手首をひねるかという細かい動きで微妙に意味が違ってくるので、聾者の方も最初はどこが違うのか分かりにくかったようである。最初にこの 3 つの表現の違いを説明した上で、調査を進めたところやはりこれらの手話の微妙な違いと文の組み合わせが大事だということが分かってきた。

最終プレゼンテーションは自分で手話に関するテーマを考え、調査を行い発表をするのだが、テーマを何にするかかなり悩んだ末に、「アメリカ手話と日本手話における非手指動作」について進めることにした。特に手話を第二言語として習得していく人達を見て、口型がうまく使えていないのを疑問に思い、口型について掘り下げてみた。アメリカ手話には「パー」「チャー」「ム」「パウ」などがあり、日本手話だと「パ」「ピ」「ポ」などがある。共通点があったり、相違点があったりなど違いがある。また、これらの非手指動作を盲ろう者の触手話ではどのように表現されるのかも合わせて発表した。全体として楽しめたクラスであった。

S566 言語獲得

言語学入門に続いて必須となっているのが、この言語獲得クラスである。講師はイスラエル出身であり、なんとイスラエル手話が出来るといふ。一度だけイスラエル手話を見せてもらったのだが、それっきりでその後クラスでイスラエル手話を見せてもらう機会はなかったりする。先生自身が英語は第二言語であるため、イスラエルで使われる言語とはアクセントが異なったりして、講義中もどのように英語を発音するか行き詰まったりしていた。

この講義では幼児がどのような過程を通して、言語を獲得していくのかというのを学ぶクラスであり、毎回様々な事例を知ることで理解が深まってきた。半期を通して、言語学入門で学んだことを基礎にして「音韻発達」「意味論発達」「形態・統語論発達」「語用論発達」「障害児の言語発達」「第二言語獲得」について学んできた。

半期を通して 4 つのプロジェクトがあり、幼児 1 人の言語発達を「音韻論」「意味論」「形態・統語論」「語用論」の 4 つに分け分析していくという課題が課せられた。周囲の学生は教育センターを訪れたり自分の家族を観察したりして、音声英語の発達を分析してきた。自分は聾であるため音声英語の分析は出来ないで、聾児の手話言語発達を分析する方向でいた。しかし、聾学校に何度連絡しても返事が一向にもらえずに、学期も終わりに近づいてきたため、先生からある幼児の会話記録をもらい、それを分析する形で進めた。周りの学生がプロジェクトを進める中で、自分だけ進められないという歯がゆい思いをしながら講義を受けてきたのがちょっと残念なところである。

また受講生それぞれに講義の流れに応じた論文が与えられ、それを要約したものを講義中に発表する課題もあった。自分は新しい言語というテーマに沿って進められた講義に対して、「Emerging Sign Language (新生の手話)」の論文を発表をした。村手話と聾コミュニティ手話の 2 つの観点で、新しい言語とは何かについて話させていただいた。新しい言語は手話であれ音声言語であれ、それをを使う人が 1 人だけでは言語としては発達せず、集団による相互作用のもとで発達していく。最初は単語レベルだったものが次第に文になり、その文を使って複雑な表現が出来るようになっていくことで言語の発達を遂げるという内容であった。

講義中では聾児や手話についても話題として取り上げられてきたのだが、聾児は通常の言語発達が出来ないというような言い方をされたことがあり、それは間違った認識であって単に言語刺激の機会がなかっただけと訂正してもらおうなど、先生と議論することも幾つかあった。今後教育者として子どもと関わる上で、言語発達を見ていく存在でもあるので、この講義で学んだことを振り返りながら教育していきたいと思う。

夏、そして2年目へ

5月下旬より夏学期が始まる。夏学期はセクション1とセクション2に分けられ、自分はそれぞれ1つずつ講義を受講する。去年の夏にボストンに引っ越して来たころは、夏の終わりとはいえ、かなりの汗をかいたため今年もまた暑い時期を過ごすのかと思うと嫌になるが、ボストンで本格的に夏を過ごすのは初めてであるため、うまく乗り切れたらと思う。4月から始めた学内でのアルバイトも今後も継続していけたらと思う。今まで学業専念してきた分、これからは行動力を増やしていろんなことに挑戦していけたらと思う。